

万葉人の愛した植物

— 本学・万葉の杜を歩く —

栃尾 有紀

はじめに

日本最古の書物といわれる『万葉集』（全二十巻）には四五—一六首の歌が収められ、その年代は五世紀初頭の仁徳朝から奈良淳仁朝天平宝字三年（七五九）正月までの約三五〇年にわたります。ただし、舒明朝以前の作は後代の人による仮託歌と考えられますので、実際の制作年代は舒明朝（六二九）から淳仁朝（七五九）の約一三〇年間となります。

『万葉集』には、一五〇種類以上の植物が歌われており、植物に関する歌は二千首近くに達します。その多くは食用・薬用・衣料・染料・建築用・工芸用などの実用的な植物であり、観賞用としての植物は少なく、植物を含め季節の景物に対する文芸意識が明らかになるのは平城遷都（七一〇）以後の天平初期です。

そこで本講座では、風流の対象として歌われた植物ではなく、人生の節目に万葉の人々と共にあった植物に焦点を当て、植物を通し当時の彼らの想いに迫りたいと考えています。具体的には、『万葉集』の三大部立のうちの挽歌、そのはじめである有間皇子の自傷歌を取り上げ、そ

こに歌われた椎の葉を通し、有間皇子の悲しみに迫りたいと思います。また本学には『万葉集』に歌われた四一種の植物を歌とともに鑑賞できるようにしたささやかな施設「万葉の杜」がございませう。本講座では、最後に「万葉の杜」を動画にてご紹介いたします。

一 『万葉集』概略

有間皇子の歌を鑑賞する前に、『万葉集』の概略をお話ししておきます。

まず『万葉集』の年代ですが、成立年は不明です。収載歌の最下限が七五九年（天平宝字三年）正月の伴家持の歌ですので、そこから収載歌の作歌年代は仁徳朝（五世紀初頭）から淳仁朝七五九年正月と分かります。ただ、先程も少し申し上げましたが、仁徳朝から推古朝の作は、三百年もあるにもかかわらず三人の歌人のものしか収録されておらず、その三人は磐姫皇后、軽太郎女、雄略天皇といずれも伝承上の有名人ばかりですので、後代の人が仮託して作ったものと考えられます。従って舒明朝（六二九—六四二）以後の約百二、三十年が実質的な制作年代です。

この一三〇年間を便宜上四期に分けることが多いです。第一期は舒明朝から壬申の乱までを指し、宮廷儀礼関連の歌が多く、作者に皇族が目立つという特徴があります。今日取り上げる有間皇子は第一期の典型的な歌人と言えるでしょう。皇族以外の歌人では額田王などがいます。

第二期は奈良平城京遷都までをさします。第二期の歌は乱後の安定と

繁栄の中にあるといわれ、皇族以外の歌も増えます。有名な歌人では柿本人麻呂や高市黒人がいます。

第三期は遷都以後の主な歌人の活動が終わる七三三年頃までを指します。律令制下で風雅な歌が志向されました。山辺赤人、笠金村、車持千年などの宮廷歌人、筑紫歌壇を形成した大伴旅人、山上憶良などの貴族、官僚、他に伝説を歌った高橋虫麻呂がいます。

第四期は天平文化の時代であり、内乱が続発し律令体制にひびが入った時代でもありました。家持関係の貴族による宴席歌、相聞贈答歌が多いという特徴があり、坂上郎女、笠女郎、狭野弟上娘子など女性歌人が目立ちます。また他に防人歌があります。

次に『万葉集』の成立についてですが、『万葉集』全二十巻は一回的に成ったわけではなく、歌集の構造や編纂方法などの内部徴証から、その編纂過程は複数次にわたることが確かめられています。現在の姿に整えられたのは平安朝初期の桓武・平城朝ごろと推定されます。『古事記』が七一二年に成立し、『日本書紀』が七二〇年に成立していることを考えると、『万葉集』は意外に新しいと言えるかもしれません。

原核となった歌集の最初の結果は持統朝から文武朝にかけてのことで、持統上皇存命中の文武朝に現巻一前半部の五三首本として成立しました。編纂の発意は持統上皇で、その意図は舒明皇統とその繁栄を寿ぐところにあつたようです。「持統」という諡号が血統を維持するという意味であることを思うと、持統がこのような歌集を編もうと考えた意図も十分に理解できます。

血統を維持するという持統の願いも空しく孫・文武は二五歳の若さで亡くなり、文武の母・阿閉皇女が即位し元明朝となり、ついで文武

の姉・氷高皇女が即位し元正朝となります。文武の遺児である首皇子（聖武）即位までの中継ぎの天皇として即位したこの二人の女帝の時代に追補の発意があり、現巻一の原形と現巻二の原形とが形成されました。巻一は雑歌を収めた巻であり、巻二には相聞と挽歌が治められています。この巻一・巻二をもって雑歌・相聞・挽歌の三大部立が出揃ったこととなります。

さらに、聖武即位の七四五年頃に再び本格的な増補が行われ、本編十五巻（現在巻一〜十五）、付録一卷（現巻十六）からなる大部の歌集へと成長を遂げます。古くから『万葉集』の編者の一人とされてきた大伴家持の関与は、この七四五年頃のことです。

時を経て、桓武朝の七八一年、皇太子早良親王の春宮大夫を兼務することになった大伴家持により二十巻本に向けて本格的な作業が開始され、皇統賛美歌集として成長を遂げてきた『万葉集』は集大成への道を見出します。『万葉集』という書名は、どの時点で作られたのか不明ですが、皇統の維持を望んだ天皇と臣下によって形成されてきた経緯をもつ歌集であつたことから「万世」「万代」の意でしょう。

『万葉集』の概略の最後に、歌体と編纂方法について触れておきます。『万葉集』の歌体には、短歌と長歌、そのほかに少数ですが旋頭歌と仏足石歌があります。九割を超える短歌が中心をなしていて、短歌以外の歌体は時代が下るほど減少していく傾向にあります。

編纂方法は、『文選』などの漢詩集に倣った雑歌・相聞・挽歌などの部立による内容別類聚方式が広く知られています。雑歌は、各種の宮廷儀礼・行幸・饗宴などの歌を中心としており、公的要素が強いという特徴があります。たとえば、巻一の巻頭を飾る雄略天皇の歌は、内容だけ

を見ると恋の歌ですが、春の若菜摘みを歌った宮廷に伝わる儀礼歌で當時は所作を伴った歌謡劇の一部だったのではないかと言われています。相聞は、男女間を中心として兄弟・親族・朋友の間で個人の心情を伝える歌をいいますが、九五%を恋の歌が占めています。

挽歌は、人の死を悲しむ歌です。漢詩においては葬儀の際に柩を挽く者の歌った歌を意味しましたが、『万葉集』では臨死の歌、殯宮の儀礼における歌、亡き人を偲ぶ哀傷の歌などを広く含んだ部立となつていきます。殯宮とは貴人を埋葬するまで遺体を安置しておくことを言い、殯宮挽歌が万葉挽歌の中心をなしています。

このような部立による編纂方針が貫かれているのは巻一から巻十六までです。巻十七から巻二十までの四巻は、家持と彼に関係する歌の内容に関わらず年月日順に配列したもので家持日記とも呼ばれており、それ以前の巻とは構造的に異なります。

また家持日記の末四巻をのぞく巻一から巻十六までは、はじめに古い歌を置き、その後今の歌を置く古今構造で貫かれています。古いものに意義を見出し規範として部立のはじめを飾ったわけです。巻一の巻頭には雑歌のはじめとして雄略天皇の歌があり、巻二の相聞のはじめには仁徳天皇の後である磐姫皇后の歌、そして巻二後半の挽歌のはじめには有間皇子の歌があります。雄略天皇や磐姫皇后に比べると有間皇子はずっと後の時代の人ですが、当時すでに悲劇の皇子として伝説的な人物であったので真つ先に慰撫・鎮魂が必要な対象として認識されており、その意味で挽歌のはじめを飾るに相応しいと考えられたのでしょう。

二 有間皇子自傷歌とその歴史的背景

それでは、有間皇子の自傷歌の鑑賞に入りたいと思います。この講座は、歌に歌われた植物、椎の葉を通して皇子の思いに迫ることをテーマとしています。そこで、有間皇子自傷歌の問題点を整理した上で、椎の葉を鍵として読んだ時、どのように解釈するのが最も良いかを考えます。

歌の背景として、有間皇子が弱冠十九歳で処刑された経緯を確認しておきます。有間皇子謀反事件については『日本書紀』斉明三年九月から四年十一月に詳しい記述があります。

九月に、有間皇子、性黠くして陽狂すと、云云。牟婁温湯に往きて、病を療むる偽して来、国の體勢を讚めて曰はく、「纒彼の地を觀るに、病自づからに蠲消りぬ」と、云云。天皇、聞しめし悦びたまひて、往しませて觀さむと思欲す。

(中略)

冬十月の庚戌の朔、甲子に、紀温湯に幸す。

(中略)

十一月の庚辰の朔、壬午に、留守官蘇我赤兄臣、有間皇子に語りて曰はく、「天皇の治らす政事、三つの失有り。大きに倉庫を起てて、民財を積み聚むること、一つ。長く渠水を穿りて、公糧を損し費すこと、二つ。船に石を載みて、運び積みて丘にすること、三つ」といふ。有間皇子、乃ち赤兄が己に善しきことを知りて、欣然びて報答へて曰はく、「吾が年始めて兵を用ゐるべき時なり」といふ。甲申に、有間皇子、赤兄

が家に向きて、樓に登りて謀る。夾膝自づからに斷れぬ。是に、相の不祥を知りて、俱に盟ひて止む。皇子歸りて宿る。是の夜半に、赤兄、物部朴井連鮪を遣して、宮造る丁を率ゐて、有間皇子を市經の家に圍む。便ち驛使を遣して、天皇の所に奏す。戊子に、有間皇子と、守君大石・坂合部連・藥・鹽屋連・鮪魚とを捉へて、紀温湯に送りたてまつりき。舍人新田部米麻呂、從なり。是に、皇太子、親ら有間皇子に問ひて曰はく、「何の故か謀反けむとする」とのたまふ。答へて曰さく、「天と赤兄と知らむ。吾全ら解らず」とまうす。庚寅に、丹比小澤連・國襲を遣して、有間皇子を藤白坂に絞らしむ。是の日に、鹽屋連・鮪魚・舍人新田部米麻呂を藤白坂に斬る。

〔日本古典文学大系 日本書紀 下 岩波書店 昭和四〇年〕
有間皇子謀反事件は、中大兄皇子（天智）が自己の政策の断行や皇位継承のために障害となる人物を次々と抹殺していった疑獄事件の最後として知られています。大化の改新後すぐ六四五年（大化元）九月に中大兄の異母兄・古人大兄皇子が、六四九年（大化五）三月に右大臣・蘇我倉山田石川麻呂が討たれています。

『日本書紀』にある有間の言葉「天と赤兄と知らむ。吾全ら解らず」からも皇子の無念を窺い知ることが出来る気がします。若くして悲劇的な最期を遂げた皇子に対しては深い同情が寄せられていたと見え、『万葉集』では有間皇子の自傷歌の次に、長意麻呂、柿本人麻呂、山上憶良など有名歌人による有間への追和歌を載せています。

それではレジュメの有間皇子の自傷歌を読みます。以下、○で囲んだ数字は『万葉集』の巻数を、その下の数字は歌番号を示します。また『万

葉集』本文はすべて小学館の新編日本古典文学全集に拠ります。

有間皇子自ら傷みて松が枝を結ぶ歌二首

- ②141 岩代の 浜松が枝を 引き結び ま幸くあらば またかへり見む
 - ②142 家にあれば 筥に盛る飯を 草枕 旅にしあれば 椎の葉に盛る
- （岩代の浜松の枝を結び、無事であったならば、また立ち帰ってこの松を見よう。）

（家にいる時は筥に盛って食べる飯を（草枕）旅に出ているので椎の葉に盛る。）

ここで簡単に語釈に触れておきます。歌にある「岩代」は現在の和歌山県日高郡南部町であり、斉明天皇が湯治に行かれた紀の温泉（西牟婁郡白浜町の湯崎温泉）から二十数キロの地です。田辺津を挟んで対岸に紀の温泉を臨むことができ、有間が処刑された藤白と紀の温泉との中間にあります。

「浜松が枝を引き結」ぶとは、草や木の枝を結ぶことで旅の安全を祈るまじないの習俗です。ちょうど同じ頃、有間の自傷歌の少し前に次のような歌が歌われています。

中皇命、紀の温泉に往く時の御歌

- ①10 君が代も 我が代も知るや 岩代の 岡の草根を いざ結びてな
 - ①11 我が背子は 仮廬作らず 草なくは 小松が下の 草を刈らさね
 - ①12 我が欲りし 野島は見せつ 底深き 阿胡根の浦の 珠ぞ拾はぬ
- 右、山上憶良大夫の類聚歌林に檢すに、曰く、「天皇の御製歌なり云々」

といふ。

（あなたの命も 私の命をも司る 岩代の 岡の草を さあ結びましょう）
（我が君は 仮の庵をお作りになる草がないなら あの小松もとの草

をお刈りなさい)

(私が見たいと思っていた野鳥は見せてもらった。でもまだ底深い阿胡根の浦の真珠は拾っていません)

作者・中皇命は、舒明と斉明の娘で、中大兄と大海人の同母の姉妹であり、孝徳天皇の後であった間人皇女（はびとのひのみこ）と考えられます。中皇命という呼び名は神と天皇との間を取り持つ人という意味であり、その役に相応しいのは直系の皇女でした。また、皇女を育てた間人氏（はしひと）は中臣氏（なかとみ）の一族で神事を司る家だったと考えられています。

有間皇子事件の発端となった斉明の紀の温泉への行幸には宮中の主立った人が同行しました。皇太子・中大兄、大海人、中皇命（間人皇女）、額田王などです。中皇命の歌は紀の温泉への往路で歌われたものであり、全体的に弾むような明るい気分があります。歌の中で中皇命は「岩代の岡の草根をいざ結びてな」と一行の旅の安全を祈って草を結ぶまじないをしようと呼びかけています。これは有間皇子の自傷歌にある枝結びと同じ習俗です。ほぼ同時期に同じ場所で同じまじないを歌いながら、中皇命の歌と有間皇子の歌は対照的な雰囲気を持っています。それだけに有間の安全を祈る結びのまじないは悲しく響きます。

次に「ま幸くあらば」ですが、マは接頭語、サキクは無事に、の意味ですので口語訳をすると「無事であったならば」となります。「またかへり見む」は、ミムのムを推量ととるか、意志ととるかで説が分かれまます。推量ととれば「また立ち返ってこの松を見るだろう」となり、意志ととれば「また立ち返ってこの松を見よう」という風になるわけです。ただ、ここは、次の歌の例にもありますように意志ととるのがいいと思います。

(例) ⑫ 3056 妹が門（むすめがかど） 行き過ぎかねて 草結ぶ 風吹き解（と）くな またかへり見む 一に云ふ「直（ただ）に逢ふまでに」

右の歌も草結びを歌っていますが、これは次に逢う時まで気持ちが離れていかないようにと別れ際に恋人同士が衣の紐を結び合うまじないと似通ったものでしょう。ほかに、旅から無事で帰ってこられるようお願いを込めて紐を結んだりもしますが、これらは全て何かが失われることがないように願いを結び止めるという意味をもつまじないです。

例に挙げた巻十二の歌は、恋人の家の前を通り過ぎることが出来ず、せめて草結びをしていくから風よ強く吹いて結びを解いてくれるな、またきつと帰ってきてこの草結びと彼女の家を見ようと歌っています。末尾の「見む」には、彼女に会おうという決意が込められているわけですから意志の意味だと解釈できます。

この例歌と同様に有間皇子の歌の場合も、無事であったならば必ずや祈りを込めて結んだ松をもう一度見ようと解釈して、きつと生きて帰ろうという皇子の悲痛で強い意志を読み取るべきだと思います。

そこで有間皇子の自傷歌のうち一首目を口語訳すると「岩代の浜松の枝を結び、そのまじない通り無事であったならば、また立ち返ってこの松を見よう」となるでしょう。悲しいとも辛いとも歌われていませんが、謀反人として連行されていく自分が無事に帰れるはずはないと知りつつも、枝結びをして祈らずにはいられないところに、死の瀬戸際まで追い詰められた有間皇子の切羽詰まった気持ちが凝縮されています。

続いて有間皇子自傷歌の二首目に移りましょう。

② 142 家（いへ）にあれば 筥（け）に盛る飯（いひ）を 草枕 旅（たび）にしあれば 椎（しひ）の葉（は）に盛る
まず簡単な語釈から入りますが、「家（いへ）にあれば」とは、家にいるとき

はいつも、という意味、「筥に盛る飯を」とは「筥」は食器ですから、相応しい食器に盛るご飯を、の意味となります。当時の食器の多くは竹製あるいは木製であったようですが、銀製のものも使われていたらしく記録が残っています。特別な場合には銀の器を使用する場面があったのかもかもしれません。

「椎の葉に盛る」は、いつもならば食器に盛って食べるご飯を椎の葉に盛って食べるという意味です。中大兄皇子の取り調べを受けるために罪人として連行されていく途中のことなので、本来ならこのような食事をするはずのない身分でありながら、貧しく寂しい食事をとらなければならぬ辛さが歌われています。きっと同行していた者たちの涙をさそったことでしょう。

ご覧いただいているスライドでは、上村松篁さんの描かれた有間皇子の絵を表示しております。ご存じの方も多くおられると思いますが、井上靖さんの小説『額田王』の挿絵原画です。どこかの山か林の中で、土の上一枚だけ布を敷き、有間皇子が座っています。皇子の前には椎の葉に盛った粗末な食事があり、皇子の側近くに仕える舍人たちが涙を流している場面です。正確には、この歌は往路のものか復路のものか分からないのですが、旧暦の十一月九日か十日と言えば、現在の暦では十二月三日あるいは四日にあたります。絵を見ますと、木枯らしが吹き、落ち葉が舞っていて、寒さが身にしみて感じられるような気がいたします。

さて本講座の鍵であり五句目に登場する椎ですが、シイという呼び名はスタジイとツブラジイとを合わせて言ったものようです。皆様も不思議に思っただけでいらつしやると思いますが、椎の葉というのは小さく、そ

の上にご飯を盛るといふのはどういふことなのか、古くから疑問視されてきました。本日皆様のお手元にレジュメと一緒に椎の葉を一枚ずつお配りしました。椎も本学の「万葉の杜」にあります。現在はまだ斜面の急なところに植えられておりますので、本日お配りした椎の葉はグラウンドの裏の木から取ってきたものです。「万葉の杜」の椎も近々もう少し見やすい場所に移植される予定です。

お手元の葉を見ていただきますと分かりますように、椎の葉というのは精々長さ七センチ程度のもので、幅も五センチほどしかありません。このような小さな葉にどうしてご飯をよそったのが研究者の悩みの種でした。旅のことであり合わせの物で間に合わせるしかなく、たまたま椎の葉しかなかったという解釈が一般的かもしれません。たとえば江戸時代の国学者である賀茂真淵は次のように言っています。

今も檜の葉を折敷て強飯を盛ことあるが如く、旅の行方にては、そこに有あふ椎の小枝を折敷て盛つらん、椎は葉のこまかに繁くて平らかなれば、かりそめに物を盛べきもの也

〔萬葉考〕宝曆十『賀茂真淵全集第一卷』所収

また、同じように昭和の万葉学者である澤瀉久孝も『萬葉集注釋』で次のように述べています。

「握飯」の枕詞は常陸国風土記にも見えて、旅に握飯を用ゐる事昔も今もかはらぬ事と見てよく、従つて葉は小さくとも枝ながら敷並べれば不都合はなく、ただ檜葉の方がより適当してゐる事は認められるが、現にありあはせたものをまにあはせ用ゐたと見ればよいであらう。

〔澤瀉久孝〕『萬葉集注釋 卷第二』中央公論社 昭和三十三年

この澤瀉さんの解釈と同じように、スライドの松篁さんの絵でも椎の葉を重ね並べて敷き、その上に食べ物置いてる様子が見て取れます。このようにすれば問題ないのかもしれませんが、ただ、椎の葉に盛ったというところに何らかの意味を見出そうとする見解もあります。これについては全体的な歌の解釈と関わってきますので後で詳しく触れることにします。

ここまで二首目の歌の語釈を見ました。そこで二首目を口語訳しますと「家で食事ならばちゃんと器に盛って食べるご飯を旅のことなので椎の葉に盛って食べることだ」という意味となり、常ならぬ厳しい立場に置かれている有間皇子が自分自身の境遇を嘆く歌となっています。

語釈と歴史的背景の把握として最後に、有間皇子処刑に至る飛鳥から紀の温泉、藤白の坂までの行程について確認しておきたいと思います。『日本書紀』によると、皇子は十一月五日の夜半に捕らえられ、九日に紀の温泉に移送され、十日に藤白の坂で処刑されています。飛鳥から紀の温泉までの距離は約一八〇キロあります。徒歩での移動距離は一日約三三キロですので、飛鳥から紀の温泉までは五日半かかることになりま

す。十一月五日夜半に捕らえられてすぐに移送されたとしても九日に紀の温泉に着くのは難しいでしょう。馬であれば一日約四六キロ移動できるので、飛鳥から紀の温泉までにかかる日数は四日です。捕らえられてすぐに移送されたとすれば、ぎりぎり間に合う行程です。

では、九日に紀の温泉で中大兄皇子の尋問を受け、十日に藤白の坂で処刑される行程はどうでしょう。紀の温泉から藤白の坂までは約一〇〇キロありますので、馬で一日約四六キロを移動したとしても二日以上を

要する距離です。このことから想像するに、有間は九日の早い時間に紀の温泉に到着し、すぐに中大兄の尋問を受け、休む間もなく再び藤白の坂まで連行されて十日の夜に処刑されたと思われる。

皇子の自傷歌は、往路での作か復路での作かはつきりとは分らないのですが、「ま幸くあらばまた返り見む」という歌の内容から中大兄皇子の尋問を受ける前、つまり往路の作ではないかと考えられてきました。皇子の行程からも、復路では、歌を詠んだり枝結びをしたり食事をしたりする余裕はなかったことが分かります。やはり、この自傷歌は、まだいくらかの希望を持っていた往路での歌でしょう。

三 自作説と仮託説

ところで、有間皇子の自傷歌には、今もって決着を見ない大きな解釈上の問題が二つあります。その一つが、この歌は皇子自身による作か、あるいは事件とは直接関係のない第三者の作か、という自作説と仮託説の問題です。もう一つは、椎の葉に盛ったご飯についてこれを皇子のための食事と考えるか、あるいは土地の神へのお供え物つまり神饌と考えるかという問題です。

まず、皇子の歌を歴史的事実を背景にして解釈する自作説から見ていきましょう。これは江戸時代の万葉学者・契沖けいちゆう『萬葉代匠記だいにしよき八初稿本』(貞享四年)以来の解釈です。おそらく通説と言って良いと思いますが、自作説ではこの二首を有間皇子の事件と重ねて享受することにより歌に悲劇性を見ます。田辺幸夫さん、中西進さん、稲岡耕二さんなどの研究者がこの立場に立った解釈をしています。特に稲岡耕二さんの

説明が非常に説得力があると思えますので、ここでご紹介いたします。

一首を貫くのは、強い祈りの心であろう。しかし、中皇命の「君が代も我が代も知るや岩代の岡の草根をいざ結びてな」には明るくはずむような響きがあるのに、この歌には暗いかげりが感ぜられる。皇子は呪力を信じつつ松の枝を結んだのである。それでも「真幸くあらば」と歌わざるをえなかったところに、皇子の心の亀裂があり、悲劇があるようだ。この歌を事件との関わりのない作として解しようとする向きもあるが、「引き結び」と「真幸くあらば」との間の亀裂は、やはり事件を背景に理解すべきものと思われる。

（稲岡耕二『萬葉集全注 巻第二』有斐閣 昭和六〇年）

また、最近のものでは池田枝実子さんの論文「有間実子自傷歌群の示すもの—挽歌冒頭歌とされた意味—」（『上代文学』八三号 平成一一年）にこの歌の研究史が詳細にまとめられてあり、その中で池田さんは従来この歌の「ま幸くあらば また還り見む」の二句に悲劇性を認めるかどうかが自作か仮託かの論拠のひとつとなってきたことを述べ「問題になるのは「真幸くあらば また還り見む」ではなく、『祈りの習俗（＝結び松）への信頼＋「幸く」あることへの仮定表現＋また還り見む』という固有な悲劇性を孕む可能性を持った不安定な表現形態である」と指摘されています。池田さんによれば、「幸く」あることの仮定表現に「見る」又はそれに類似した語の推量形が続く表現は五例あり、そのうち三例が天皇の乗物を指弾した罪で配流された穂積老の関係歌であって、しかもこの老の歌と考えられる三例のうち二例に神への祈りの習俗が歌い込まれているそうです。つまり、この型からは、祈りを信頼しきれない境涯におかれた人物に固有の心情が浮かび、そこに悲劇性を見ることができ

きるということになります。これもまた非常に説得力のある説明だと思えます。

さて、以上のような自作説に対し、仮託説はどのように説明されているのでしょうか。仮託説は、どうやら折口信夫が「萬葉集講義」（『短歌講座 第五巻』改造社 昭和七年、『折口信夫全集 第九巻』所収）で示唆したことから始まるようです。この二首について言えば、直接的な感情表出がないので題詞から切り離してみたとき類型表現による一般的な旅の歌とみることができるとして本来皇子とは無関係な旅の歌が仮託伝承された結果ではないかという解釈となります。山本健吉さん、伊藤博さん、露木悟義さん、福沢健さんなどの研究者がこの立場に立っています。

露木さんは「有間皇子と岩代」（『古代史を彩る万葉の人々』笠間書院 昭和五〇年）において、この二首は旅の歌としか見られない歌であり、また大和から紀の温泉までの日程・距離・護送条件・皇子の心理などから考えて、斉明四年の作ではなく、皇子が前年紀の温泉に旅した折の作が転用されたのではないかと述べておられます。

また、福沢さんは「有間皇子自傷歌の形成」（『上代文学 五四号』昭和六〇年）において「ま幸くあらば」から皇子の固有な体験を読み取ることは不可能であり、また「還り見む」は「土地ほめ」の類型表現であるので「歌の内容から謀反に失敗して護送される有間皇子の固有の心情は窺いにく」として、自傷歌は「岩代での驛旅歌を仮託・転用する形で」成立したのではないかと考えられました。

確かに、有間皇子の自傷歌は、題詞を取ってしまえばただの旅の歌と見えなくもありません。この歌には、悲しいとか辛いとか直接感情を伝

えるような言葉は見あたりませんし、悲劇性が見られると言われてきた「また還り見む」ももう一度その土地を見よう見たいという旅の歌における「『土地ほめ』の類型表現」と考えることもできます。二首目の椎の葉に盛った食事にしても、旅先での粗末な食事を嘆いたに過ぎないと考えれば、もともとは有間皇子の事件とは全く別の機会に作られた旅の歌が皇子の悲劇と結びつけられ仮託伝承されたと解釈してもおかしくはないわけです。

しかし、稲岡さんや池田さんが指摘されているように、祈りつつもそれを信じられないという心の亀裂は、事件を背景に解釈しなければ理解できないもののように私には思われます。皆さんは、どのようにお感じになるでしょうか。自作説と仮託説の問題については、食事説と神饌説とを見てからもう一度考えたいと思います。

四 食事説と神饌説

有間皇子の自傷歌の二首目にある椎の葉に盛ったご飯についても二つの解釈があります。それは、これを皇子のための食事と考えるか、土地の神への供え物と考えるかという問題です。

食事説は、一般的解釈と言っていると思いますが、有間皇子が紀の温泉へ護送される旅中で実際にとったわびしい食事を歌ったと考える説です。たとえば『萬葉代匠記』や『萬葉集講義』では次のように説明しています。

サラスタニ旅ハ侘シキヲ、殊ニ謀反ノ事ニヨリテ捕ハレテ、物部ノ中ニ打囲マレテオハシマス道ナレハ、萬引カヘタル様筈ニモル飯

ヲ椎ノ葉ニ盛トヨマセ給ヘルニコモレリ。

（『萬葉代匠記』精撰本）元禄三年『契沖全集第一卷』所収）
事なくて家に在る時には然るべき飯筈に盛りて食すべき飯をば、今は旅にあれば、椎の葉に盛りて食するが悲しく物あはれなる事よとなり。

（山田孝雄『萬葉集講義 卷第二』昭和七年）
食事説に対して神饌説は戦後になって出てきた解釈です。神饌説では、ここに歌われているのは有間皇子のための食事ではなく、その土地の神である岩代の神への供え物であり、だからこそ椎の葉に盛ったのだろうと考えます。この解釈をはじめに述べられたのは高崎正秀さんで昭和三十一年のことになります。

奈良では今でも（昭和三十年代当時）小さな椎の葉に少量ずつお供え物盛り分けて神仏を巡拜してまわる習俗を歌人の高橋英子より聞き、これをもとに「家にをれば、立派なちやんとした御器に盛つて、お供へするのだが、今は旅先のこと故、椎の葉に盛つて差上げます。どうぞ神様よ、御納受下さいませ」と「紀州岩代の道祖神の前

前に供へて」旅路の安全と身の行く末を祈願した歌だと述べた。
（高崎正秀「萬葉集の謎解き」『文藝春秋』昭和三十一年五月）
神饌説が出て来た背景には、恐らく椎の葉にご飯を盛るということの不自然さがあります。急な旅のことで在り合わせのもので間に合わせるしかなかったとは言え、椎の葉では小さすぎますし、周りにそんな小さな葉しかなかったというのもおかしいと思われたのでしょうか。そこで、椎の葉に盛ったことに積極的な意味を見出そうとしたのが神饌説です。同じく神饌説をとる犬養孝さんは次のように述べています。

「家にあれば」の歌は、戦時中にたんなる寂しい旅情とみて皇室

の祖先の質素を贅えたのは別として、戦後はこの暗い史実にもとづいて考えられ、椎の葉に盛ってたべらせられる冷遇への怒りや悲しみとして多く解釈されている中で、一部に椎の葉に盛るのは神饌ではないかとする説があった。皇子の二歌が同じ題詞のもとにあるし前歌が道の神への祈りであるように、これは神饌ではなからうか。こんにち岩代の土地では、この歌はまったく無関係に、子供が生まれて三〇日経過後の朔日または一日日には、米の粉をこねただけで煮てないダンゴをヒトゲと称して、かしの葉に二つひとかさねして、東西の氏神に供える風習を伝えているのも一つの傍証となるのではなからうか。

〔犬養孝 『万葉の旅 中』 世界思想社 昭和三九年〕

神饌説は、今まで納得のいかなかった状況に答えるものとして一時は国語の教科書にまで紹介されたというのですが、いくつかの問題があることが指摘されています。たとえば西郷信綱さんは、有間皇子の自傷歌は聖徳太子作と伝えられる巻三・四一五や日本書紀歌謡一〇四などを先蹤としているのであり「伝承歌を自己の境涯において鑄直し、作りかえているわけで、だから当時の人は「旅に臥せるこの旅人あはれ」の世界を下地にもち、「旅にしあれば椎の葉に盛る」の歌をうけたはずで、後世風に言えば本歌取の関係がそこにある」と述べ、神饌説をとるとその連想を断ち切られてしまうと指摘されました。

紀104 しなてる 片岡山に 飯に飢て 臥せる その旅人あはれ 親
無しに 汝生りけめや さす竹の 君はや無き 飯に飢て 臥せる
その旅人あはれ

〔『日本古典文学大系 日本書紀 下』 既出〕
上宮聖徳皇子、竹原井（大阪府柏原市高井田）に出遊でましし時

に、竜田山の死人を見悲傷して作らす歌一首

③415 家ならば 妹が手まかむ 草枕 旅に臥やせる この旅人あはれ
また稲岡さんは、神饌説の発想そのものに問題があることを指摘して、食事説をとるべきことを主張されています。

この一四二歌の形式は「家であれば：(A)：旅にしあれば：(B)：」であり、AとBとの落差の大きさによって、旅先での悲嘆が強調されるところに特徴がある。わたしに疑問に思われるのは、道祖神に手向けをしつつ、それと対比的に「家であれば：」と歌ったとする、神饌説におけるその発想自体と言ったら良からうか。

高崎説によれば、この歌は家で神に供え物をする場合(A)と、旅先で道祖神に手向けをする場合(B)とを比較していることになり、道祖神への手向けが、故郷の家における氏神への神饌の御器を想起させ、しかも習俗として特定された木の葉に盛っているにもかかわらず、その粗末さが嘆かれるというのは、この作品の内部からではなく、むしろ外側から強い構えた発想で、リアリティを欠いたもののように思われる。端的に言って「葉に盛る」習俗が岩代なら岩代に固有のものであればあるだけ、(A)と(B)とを比較し対照して歌うこと自体その抒情的必然性を乏しくするだろう。

この歌は神饌を歌ったわけではなく、捕らえられて紀伊湯へ護送される途中の食事の有様を、家に居ての食事と対比しつつ淡々と詠じたものと考えられる。異常な迫力は、死を直視せねばならなかった皇子の立場の、おのずからなるあらわれであろう。

〔『萬葉集全注 卷第二』 既出〕
確かに神饌説は魅力的な解釈です。けれど、神饌説をとってしまうと

西郷さんの指摘されているようにこの歌の素地が失われてしまいましたし、稲岡さんが指摘されているように道祖神へのお供えに椎の葉を使用することを嘆くという不自然な状況を作り出してしまふことになり、皇子の実作としても、ただの旅の歌としても、訴えかけてくるものが少なくなってしまうように思われます。

五 おわりに

ここまで、有間皇子の自傷歌を読み、問題点を整理してきました。皆様は、何通りか提示されている解釈の中で、どのように考えるのが良いとお感じになったでしょうか。最後に、今一度お手元の椎の葉をご覧いただきつつ、私なりの考えを述べたいと思います。

これは少し飛躍し過ぎかも知れませんが、私はこの歌の解釈の鍵が椎の葉にあるのではないかと思っています。仮託説にしる神饌説にしる、この二首の歌について有間皇子の実作ではないと疑ったり、皇子の食事ではないと疑ってみたりする説が現れた背景には、この歌のリアリティをどう捉えるかという問題があるからです。処刑を目前にした者の深い嘆きや悲しみの表現がないこと、椎の葉というあまりに小さな葉で食事をとったこと、これらをリアルでないと考えるならば、この二首の歌を有間皇子の自傷歌と認めることはできず、食事についても何らかの説明が必要だと感じるでしょう。

しかし、リアリティとは何なのでしょう。事実は小説よりも奇なりと申します。激しい感情の吐露がないのは、勿論この歌が万葉挽歌の初期の作品であり当然の手法として旅の歌の類型表現に乗っ取って歌うし

がなく、従って西郷さんが指摘したように過去の歌を下敷きにしたため一見ただの旅の歌と見紛うばかりの淡々とした表現になったということもありますが、もしかすると人はあまりにも辛い場面に遭遇した時は、返ってそれを言い表す言葉を持たないということかも知れません。皇子は、悲しいとか辛いとかいう言葉ではとても表現し得ない悲惨な状況にあったのであり、それ故に淡々と歌うしかなかったのではないのでしょうか。むしろ、この淡々とした表現こそ本物の絶望、窮地に立たされた人間の孤独が込められていると解釈できるように思います。

同じように、椎の葉についても、ご飯を盛るにはあまりに小さい葉であったことにこそ、本当に他に何もなかった厳しい現実が歌われていると考えることができます。日常からは到底想像できないからこそリアルなのではないでしょうか。説明がつかないからと言って納得できるように解釈を曲げてしまうのでは受け取る側として間違っているのではないかと感じます。

今ここで実際に椎の小さな葉を前にして有間皇子を思うと、時を超えて当時の状況がまざまざと想像されるような気がいたします。この一枚の葉を通し、非現実的とさえ思われるような特異な状況を思うと、悲しみはよりリアルに胸に迫ってきます。私は、この自傷歌の表現をそのまま素直に受け取り、有間皇子の実作であり、椎の葉に盛った食事も皇子のための食事であったと解釈するのが最も良いように思います。

折角お越しいただいておりますので本来ならば実際に「万葉の杜」を歩いてご鑑賞いただきたいのですが、まだ整備が終わっておりませんし、かなり寒い時期のこととて、動画にてご紹介させていただきます。設立二〇周年を迎えます来年度の春になりましたら、整備も済み花も咲

き美しく生まれ変わっているかと思えますので是非一度足をお運びいただきたくお願い申し上げます。

〔万葉の杜〕動画鑑賞)

それでは私の話を終わらせていただきます。ご静聴ありがとうございます。ありがとうございました。

(とちお・ゆき 本学日本研究センター研究員)